様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　７ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：１４１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2024
課題番号：１９Ｋ１０７６７

研究課題名（和文）看護学生の深い自己理解をもたらすコミュンケーション教育方法の開発

研究課題名（英文）Development of communication education methods that bring about deep self-understanding in nursing students

研究代表者
井村　香積（Imura, Kazumi）

三重大学・医学系研究科・准教授

研究者番号：００３６２３４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、看護学生の自己の振り返りからコミュニケーションの教育方法を検討することであった。看護学生が困難とする場面は患者のネガティブな発言であることが明確になった。その場面を設定し、ロールプレイを行った。なお、その場面を録画した。その後、録画した映像を学生のみでの振り返りと教員とともに振り返りを行った。その結果、学生のみでは、患者の思いが汲み取れないという結果だったが、教員とともにでは、表情から相手の思いを推測した振り返りができていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
社会的意義としては、今回の研究結果より、コミュニケーション場面を振り返る際、学生のみで振り返るより、教員とともに振り返る方が、患者の気持ちを推測した振り返りができたことが明らかになったことである。このことがコミュニケーション教育に貢献できると考えられる。
学術的意義は、学生は教員とともに振り返ることでコミュニケーションの向上に繋がることが明らかになったが、教員が学生に振り返りをさせる視点までは明らかになっていない。今後、このことを明らかにすることで、コミュニケーション教育の研究が発展していくと考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the study was to examine methods of teaching communication based on nursing students' reflections on themselves. It became clear that the situations in which the nursing students had difficulty were negative comments made by the patient. We set up that situation and conducted a role play. The scene was recorded. Afterwards, the recorded video was reviewed by the students alone and with the faculty. The results showed that the students alone were unable to understand the patient's thoughts, but together with the faculty, they were able to infer the patient's thoughts from the patient's facial expressions.

研究分野：Nursing Education

キーワード：看護学生　病気に対する負の感情　コミュニケーション　振り返り

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

1. 研究開始当初の背景

看護学生の基本的な生活能力や学力の変化とともに、コミュニケーション能力の低下が指摘され（厚生労働省,2011）、看護基礎教育機関では看護学生の実践的コミュニケーション力の向上を目指した取組みが行われている。その中で、模擬患者を設定し情報収集のためのロールプレイ（実藤,2015）、患者教育を想定したロールプレイ（八尋,2017）等の看護学生を対象とした実践報告がある。ロールプレイ後に振り返りをさせたことで、コミュニケーションの重要性の認識が増えたことが報告されている。また、ロールプレイに患者の負の感情表出を取り上げた研究（岡本ら, 2018）では、抗がん剤治療中の患者で今後の生活に不安があると想定してロールプレイを行ったが、多くの学生が看護師役としての対応が上手くできず、失敗の感情のままで終わってしまったことが報告されている。これらの教育では、ロールプレイ等の振り返りを取り入れているが、学びとしてはコミュニケーションの重要性の認識等の浅いレベルの理解に留まってしまっている。自分が対応できなかったことの意味を考えたり、自己の感情や思考を洞察したりという深いレベルの振り返りには至っていない。

一方、臨地実習でのコミュニケーションに関する研究では、プロセスレコードが多く用いられている。実習中に患者とのコミュニケーションで「うまく返答ができなかった」「どのように対応すればいいのか分からなかった」と不全感を抱いた場面をプロセスレコードで振り返り（多久島他,2015）、学生の視点からではあるが患者の心情や思考を振り返って推測することはできていた。しかし、学生が不全感を抱いていたにも拘わらず、自分自身の感情や思考に着目した振り返りはできていなかった。プロレスレコードによる振り返りでは、患者の知覚が優先される傾向があるのだろうか。

また、看護では「振り返り」と同義として「リフレクション」という概念が導入されている。この概念はDewey の実践的認識論から発展し、近年、看護学にも導入されている。看護学生に対する研究では、実習後の振り返りにリフレクティブ・ジャーナルを用いた効果の報告がある。しかし、ジャーナルという記録用紙に記入するだけでは、振り返りが十分にできないことも報告されている。そのなかで、矢田(2017)は教員の発問によって学生のリフレクションを成功させることができるかを検証し、学生の行動を丁寧に振り返ることが学生の自己の批判的分析を強化することにつながると考察している。しかし、発問について詳細に記述されておらず、どの発問がリフレクションを成功させるかは明記されていなかった。これらのことは、振り返りには深さがあり、浅いレベルから深いレベルまでの自己理解のレベルがあることが示唆される。つまり、**学生は自分自身の心情を洞察して自己理解を深めることは難しいことだが、自己理解が少しずつ深まっていくことでコミュニケーション力も高まるのではないかと考えられる。**

以上のことより、学内演習、臨地実習に焦点をあてた先行研究では、学生が行ったコミュニケーション場面について振り返りをしているが、浅いレベルの振り返りに留まっており、それが看護学生に実践的なコミュニケーション力が身につかない要因ではないかと推測された。

２．研究の目的

〈研究１〉患者からの苦悩や不安などの負の感情を表出されたときに、コミュニケーションを困難に感じる学生の理由と影響要因を明らかにする。

〈研究２〉看護学生が対応に戸惑った盤面についてシナリオを作成し、その妥当性を確認する。

〈研究３〉患者が負の感情を持った患者とのコミュニケーションのロールプレイを行い、その場面の振り返りを３通り行い、その違いを明らかにする。３通りの振り返り方は学生のロールプレイの場面を録画せず、その画面を想起して学生のみで振り返る、ロールプレイの場面を録画し、、その場面を想起して学生のみで振り返る、ロールプレイ録画しその映像を見て、学生のみで振り返る、その録画映像を見て教員ともに振り返る

３．研究の方法

〈研究１〉対象は患者から負の感情を表出され、どのように対応したらよいかともまどった経験のある１～４年の看護学生 12 名であった。研究デザインは質的記述的研究とし、半構造化面接を行った。面接内容は、次の３点である。１）患者から表出された負の感情とはどのような内容だったか、２）その時どのように感じ、どのように対応したか、３）対応に戸惑ったのはなぜだと思うか

〈研究 2〉学生の語りの中から、シナリオを作成し、その内容を専門家２名に確認してもらった。シナリトの内容：20 歳代で将来に夢を抱いており、それに向かった努力をしているが、体調不良があり、受診すると「がん」であり治療をしなければならないことを医師から説明を受けて落ち込んでいるとした。

〈研究 3〉対象は実習を終えた３年生の看護学生 5 名であった。学生と患者役のロールプレイのお薄を録画し、ロールプレイ終了後、その場面を映像なし学生のみでルイ帰り、その後、録画を用いてその場面を振り返る。最後に録画を用いて教員とともに振り返った。

４．研究成果

〈研究１〉患者から表出された感情の内容では、「治療をしているけど、検査の結果がよくなかった」「頑張って治療してきたのに・・・」といった【病状や治療に対する患者の思い】が抽出された。この状況において、看護学生の思いは【思考停止】【戸惑う】【何か話さないといけない】という思いを抱いていた。そして、その時の対応として、「大丈夫ですよ」などといった【慰めの言葉】をかけたり、【沈黙】になったり、【退室】していた。対応に戸惑った遺留については、「どうしてだろう」「頭が真っ白になった」という発言であり、明確な理由を抽出することができなかった。

学生は病気や治療からくる患者の気持ちを吐露されると【思考停止】【戸惑う】状態になり、患者に何も言うことができなく【退室】したり、表面的な【慰めの言葉】をかけたりしており、看護学生として、役割を果たせないのは、思考停止、何かを離さないといけないという学生の自己中心的な思いが先行しているからだと考えられる。患者からの負の感情を吐露された際、に、患者の感情に対して、学生がどのような気持ちをいだいたかという事故の感情をとらえることができれば負の感情を表出された際の対応が可能になると考えられる。しかし、戸惑った理由については、明確な理由が抽出されなかったことを踏まえると患者との会話では、【思考停止】【k戸惑う】で終わるため、学生１人では、その時の自己の感情を深く振り返ることができないと考えられる。そのため、その場面を後から教員や指導者と振り返ることで、自身の感情を振り返ることができるようになり、学生のコミュニケーションの向上に繋がると考えられる。

〈研究２〉専門家２名の意見は、学生と同年代の事例であり、学生としては患者の気持ちを推測しやすく、看護学生として患者とコミュニケーションをつることができるという意見であった。そのため、この内容でロール王令を進めることにした。

〈研究 3〉１）映像なしで学生のみの振り返り：話す内容が見つからず〈沈黙〉したことや〈話の入り方や終わり方〉〈患者の表情がわからず気持ちが汲み取れない〉といった内容だった。学生のなかには、患者の話している言葉のみをたどり、その内容を〈要約〉するという振り返りで終わっていた。

２）映像を用いて学生のみでの振り返り：矢継ぎ早に聞いて〈聞きたい思いが先走っている〉や〈話題転換〉をしていることに気づいた。

３）映像を用いて教員とともに振り返る

〈視線が合わないのは患者が話したくないと思っている〉〈患者が病気のことを話せる状況であるかを確認していない〉〈自分がいたたまれなくて話題転換〉といった内容が州出された。

映像なしで学生のみの振り返りでは〈沈黙〉〈患者の表情がわからず気持ちが汲み取れない〉は、患者他の立場というよりも自分自身が困ったという視点で振り返りがなされている。映像を用いて学生のみで振り返りでは、〈聞きたい思いが先走っている〉や〈話題転換〉といった内容は、このような対応をすることで患者によりそった会話でないことを含んだ振り返りをしている可能性がある。しかし、これはデータから抽出されたものではないため、今後、検討する必要がある。

映像を用いて教員とともに振り返るでは、患者の気持ちを推測した内容や、自分自身のその時の気持ちの内容が抽出されている。これは、教員が学生と振り返る際に、学生に振り返った内容に対して、どのように考えて行動したのか、どのように感じたのかを確認することができたためだと考える。他者の気持ちや自己の気持ちを振り返り言語化するためには、教員とともに振り返り、その時の気持ちを振り返ることができるようなギドが必要であることが示唆された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Imura Kazumi,Hayashi Tomoko,Matuda Mikiko
２．発表標題 Communication Difficulties of Nursing Students by Reflecting the Interactions between Students and a Simulated Patient with an Instructor:A Pilot Study
３．学会等名 INC 2023 The14th（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	牧野　孝俊 (Makino Takatoshi) (50389756)	群馬大学・大学院保健学研究科・准教授 (12301)	
研究分担者	林　智子 (Hayashi Tomoko) (70324514)	名古屋学芸大学・看護学部・教授 (33939)	
研究分担者	松田　未来子 (Matsuda Mikiko) (20871057)	三重大学・医学部・助教 (14101)	
研究分担者	仲　律子 (Naka Ritsuko) (00367880)	藍野大学・医療保健学部・非常勤講師 (34441)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関